

## 放射線と薬の力で医療はどう変わるのか

オーガナイザー

小川数馬(金沢大新学術)  
木村寛之(京都薬大)

核医学診断・治療において、放射性医薬品は必要不可欠である。2021年に<sup>177</sup>Lu-DOTATATE(ソマトスタチン受容体陽性の神経内分泌腫瘍)と<sup>131</sup>I-MIBG(褐色細胞腫・パラガングリオーマ)の2剤の核医学治療用放射性医薬品がわが国で承認されたように核医学治療への期待は大きく、低分子から高分子まで、多様な癌指向性分子を輸送担体として用いた創薬研究が進み、新展開を迎えている。

一方、20年に承認されたホウ素中性

子捕捉療法(BNCT)は、中性子線照射により、癌に集積したホウ素(<sup>10</sup>B)薬剤に生体内で核反応を起こさせ、生じたLi原子核と $\alpha$ 粒子を用いた癌治療法であり、<sup>10</sup>Bを導入した薬剤が必須である。両治療法とも薬と放射線を組み合わせた治療法であるが、それに加えて、治療前の画像診断により治療薬の標的組織への集積を予測し、効率的な治療ができる、いわゆる、セラノステクスである。

本シンポジウムでは、核医学治療・BNCTの分野で最先端の研究を行っている研究者にご講演いただき、本分野の進捗と将来の可能性について議論する。(小川数馬)

躍進する若手による  
物理系薬学研究のフロンティア

オーガナイザー

小川美香子(北大院薬)  
加藤博章(京大院薬)

物理系薬学は、薬学研究の基盤となる基礎科学であると同時に、近年、化学や臨床薬学など他の分野との融合も進み、新しい学問的展開を見せている。

本シンポジウムでは、物理系薬学部会奨励賞受賞者2人(近畿大薬・大竹裕子氏「ナノ化技術を基盤とした経皮吸収型製剤の開発と薬物送達機構の解明」、国立衛研・原矢樹氏「原子間力顕微鏡法を用いたナノ脂質膜小胞の力

学的特性計測法の開発とその応用」と、物理系薬学分野における最先端の研究を行っている若手研究者2人(和歌山県医大薬・入江克雅氏「結晶構造と分子動力学計算によるイオンチャネルにおける二価カチオンの阻害機構の解析」、東工大生命理工・神谷真子氏「光スイッチングラマンプロブの開発による高精度イメージング」)を演者として討論を行う。

新しい視点で物理系薬学研究を進める若手研究者との議論を通し、物理系薬学のさらなる発展に資することを目的とする。(小川美香子)

ウィズコロナ時代の新たな医療に  
対応できる薬剤師養成

オーガナイザー

有澤光弘(阪大院薬)  
平田収正(和歌山県医大薬)

2021年度補正予算により、デジタル医療教育用のDX機器や、臨床実習に際しての能力を高めるシミュレータなどの機器等が全国の大学(医歯薬保健系学部)に整備・活用され始めた。本シンポジウムでは、本事業の目的、現状や波及効果について文部科学省から発表していただくと共に、薬剤師の偏在と確保対策について厚生労働省か

らご紹介いただく。また、これら機器の整備・活用状況・今後の展開について、千葉大学薬学部と大阪大学薬学部の取り組みを情報共有していただく。

さらに、この取り組みは、従来の対面型実習等では獲得できなかった能力を学生に修得させる教育プランを開発・実施するに至るものであることから、薬剤師偏在や質保証などに与える効果についても、金沢大学病院薬剤部および薬学6年制教育研究検討委員会の取り組みを交え、広く深く議論したい。(有澤光弘)

## 環境・衛生部会衛生試験法シンポジウム

## 水環境における化学物質分析の最新動向

オーガナイザー

鈴木俊也(東京都健安研セ)  
藤原泰之(東京薬大薬)

私たちが日常生活や産業活動の中で使用している化学物質の中には、そのまま、あるいは代謝・分解物として環境中に混入するものがある。それら化学物質は時代と共に移り変わり、生物に対して悪影響を及ぼす、または懸念される化学物質は規制の対象とされる。

本シンポジウムでは、主に、近年、話題となっている水環境中の化学物質

の分析法や存在実態について取り上げる。ヒト健康影響が懸念されているPFOsやPFOAに代表される有機フッ素化合物(PFAS)、水生生物への悪影響が懸念されているヒト用医薬品などの生活由来の化学物質、農薬等を含む多成分の化学物質の効率的なターゲットスクリーニング分析法、供給不足や価格の高騰で近年問題となっているヘリウムガスの代替ガスについて、最新の研究成果を発表・解説していただき、関係者と意見交換を行いたい。(鈴木俊也)

アカデミック・ディテリングが  
薬剤師の専門性を確立する

-医薬品の基礎薬学的違いを活用した処方支援

オーガナイザー

小茂田昌代(千葉西総合病院薬)  
宮崎美子(戸田中央総合病院薬)

アカデミック・ディテリング(AD)とは、コマーシャルベースではない公正中立な基礎薬学と臨床のエビデンスをもとに医薬品比較情報を能動的に医師に提供することで、処方支援を行う活動のことである。非ステロイド系鎮痛薬(NSAIDs)は古くから多くの薬剤が使用されているが、有効性比較による臨床のエビデンスは限られており、医師の使い慣れた薬剤が処方されている現状にある。

そこで、NSAIDsを基礎薬学的視点から各薬剤の徹底比較を試みた。そして、患者の心血管・腎機能・胃腸障害のリスク評価と、処方支援するDecision-Treeを含むAD資料を紹介する。

本シンポジウムでは、薬学部におけるAD教育、化学構造式、薬理学、薬物動態学の専門家にNSAIDsの比較と臨床上のエビデンス、さらに最適処方に向けたClinical Decision-Makingとは何かについて、講演いただく予定である。薬剤師によるADの実践により、医師と薬剤師協働で薬物療法の個別最適化を目指す。(小茂田昌代)

健康と疾患に関する  
グローバル&ケミカルエピジェネティクス

-病態解析から次世代エピゲノム診断・創薬に向けて

オーガナイザー

南敬(熊本大生命セ)  
稲垣毅(群馬大生調研)  
古賀友紹(熊本大発生研)  
金田篤志(千葉大院医)  
薬師寺文華(北大院薬)  
鈴木孝禎(阪大産研)

21世紀初頭にヒトゲノム解読が一段落し、そのゲノム情報から病態理解が進んだ一方、難治性癌や生活習慣病の多くは単なるゲノム一次配列の異常だけでなく、ヒストンメチル化・アセチル化やDNAメチル化を含むエピジェネティックな異常と環境要因が複雑に絡んでいることが判明してきた。現在、エピゲノム解析技術の革新的な進歩と

共に、エピゲノム修飾を阻害する薬剤が次世代創薬として臨床応用されつつあるが、薬学領域においてエピジェネティクス研究における議論が十分とは言えない。

そこで本シンポジウムでは、発癌・血管新生・炎症・加齢生活習慣病をもとに包括的なエピゲノム動態変化を先駆的に解析する研究と、ケミカルパイオロジーをもとに新たなエピゲノム制御や阻害手法を確立する最先端研究を紹介する。その有機的な融合を踏まえ、健康時や病態進展に深く関与するエピゲノム変化とその同定法、さらには病態標的を絞った新規阻害剤創生の可能性について「エピゲノム薬学」という観点から討論を深めたい。(南敬)



乾燥肌の治療薬

# ビーソフテン®

ヘパリン  
類似物質  
配合

保湿

抗炎症

血行促進

<p>保湿力を高める</p> <p><b>クリーム</b></p> <p>販売名: ビーソフテンクリーム 内容量: 100g [第2類医薬品]</p>	<p>広範囲に塗りやすい</p> <p><b>スプレー</b></p> <p>販売名: ビーソフテンスプレー 内容量: 100g [第2類医薬品]</p>
<p>スーッと浸透する</p> <p><b>ローション</b></p> <p>販売名: ビーソフテンαローション 内容量: 50g [第2類医薬品]</p>	<p>塗りやすい泡タイプ</p> <p><b>泡スプレー</b></p> <p>販売名: ビーソフテン泡スプレー 内容量: 100g [第2類医薬品]</p>

帝國製薬グループ

**テイコクファルマケア株式会社**

〒769-2695 香川県東かがわ市三本松567番地  
TEL 0879-25-7771 FAX 0879-24-1611



薬事日報

薬のことなら  
薬事日報ウェブサイト

https://www.yakuji.co.jp/

仕事のお供に。

ヘッドラインニュース、  
新製品情報など配信。  
広告も募集中。